

I

科学的説明は、経過する時間の中で連続的に変化する自然の状態を微視的に捉えるため因果関係を説明できないが、物語りの因果性は、人間にとって意味のある尺度を自然過程に適用して分節化し、特定の原因と結果を選定するという違い。

業務の一環として遺骨の説明をする火葬場の職員は、いつも通りの説明を淀みなく終えたつもりでいたが、自分の説明を否定するかのようにも受け取れる言葉を投げかけられ、即座には理解することができず、呆気にとられてしまったから。

II

散歩にも出かけずいつになく明るい表情をしているのに、犬の所在を尋ねると、首を絞めたと不穏な答えを口にしたため、母がその心中にただならぬものを抱えていると感じ、ただ受け流すような相槌を打つわけにはいかないと思ったから。

切れ目なく連続し互いに異なる特定の変化を抽出できない脳状態ではなく、断続的に異なる変化をみせる心的状態を個人の行為に特定できることに基ついて、原因―結果の連関を語るための原型的な理解の方法が得られるということ。

生前の母が、まだ少年だった兄を亡くした耐え難い喪失感を紛らわせるかのよう

自分が過去に行った行為の意味について、現在の自分が自他に対して理解し説明するという物語る能力を有していることが、行為の自由をもつ人間に対してその行為の結果の責任を問い、これに応えることを可能にしているという結びつき。

に、架空の犬のリードを持ち歩いていた姿を思い、母がクリーニング店に遺したネクタイをリードに見立てて遺骨に捧げること、少しでも慰めたかったから。

思いのままに振る舞い、自らの行為の結果に責任を負うという、動物や機械にはない人間独自のアイデンティティの源にあるのは、人間が自らの行為を意図や場面の状況などの諸要素と結びつけ、その理由を物語るという能力である。

母が架空の犬を絞めたのも兄の喉仏も首に関連するが、首に巻かれるネクタイが、それをぶら下げて歩く佐知子の姿が亡き母の異様な習慣に重なるのを暗示する重要な小道具となり、母の哀しみに寄り添おうとする佐知子の姿を読者に示している。

いる。

III

問一 ① 逢えずにつらい思いをしている者がこの世に存在しているとさえあな  
たに知られない。

② 真玄は、山城守の娘からすげない返事をもたらしたからといって娘をあ  
きらめられる恋心ではないので、その後も娘に恋文を送ることを何度も  
くり返したのである。

問二 信玄を婿にとるつもりがないという山城守のことばを受けて、真玄が大  
勢の仲間をひきつれ押し寄せて山城守の娘を奪い取って恥をかかせようと  
いうこと。

問三 山城守の娘の召使である千鳥が、娘への仲介を真玄があまりに熱心に頼  
むので、娘へ送る恋文を取り次ぎ、それを娘へ渡す機会を見はからって返  
事をもたらしてこようといっている。

問四 「見る目」はつまり「逢うこと」であって、「山城守の娘に実際お逢いし  
たこともないのに、どうしてこれほど恋しく思われるのだろう」という恋  
心を訴えている。

問五

噂にだけ聞いて恋い慕うばかりの悲しみで涙を流し、その涙がまるで深  
い川のようにみとなりてそこに浮き沈みするほど苦しんでいると訴える真玄  
の和歌に対して、たとえ真玄が川で浮き沈みするほど苦しんでいたとして  
も、その涙川に浅瀬がないなら、求愛を受け入れて逢瀬をもつ機会などな  
いと返事をした。

問六

「月夜からす」に「月夜の鴉」と、山城守の娘への思いが「尽き(ず)」  
の意味を掛け、さらに、鴉が「鳴く」ように声をあげて「泣く」と掛詞を  
用いることで、鴉である真玄の擬人化を読者が受け入れやすくなる効果が  
ある。

IV

問一 私は長い間鳳凰という鳥がこの世にいたとうわさに聞いていた。今本当にその鳳凰を目の当たりにした。おまえは私にその鳳凰を売るつもりはあるかね。

問二 通りすがりの人は買い取った鳳凰を楚王に献上しようとした。

問三 楚の国の人々は誰もがみな、通りすがりの人が献上しようとした鳥は紛れもなく鳳凰であり、楚王に献上するのが適切であったのだと思った。

問四 しきしやこれをわらわざるはなし。

問五 山鶏を鳳凰だと信じた通りすがりの人が二千金を支払ってようやく手に入れた山鶏を死なせてしまったけれども、楚王に献上しようとしたことを評価され最後に二万金の褒美をもらったことから、識者は根拠のない事柄に大金を投じたり褒美を与えたりした通りすがりの人や楚王を愚かだと考えたから。